
NATIONAL
DIET
LIBRARY
MONTHLY
BULLETIN
2023.02

国立国会図書館 月報



林光の手稿譜を「読む」 吉田 宗彰

日本図書館紀行 特別編 京都府立京都学・歴彩館

京都府立京都学・歴彩館に勤務して

様々な寄贈資料にみる歴彩館の資料収集うらばなし

国立 国会 図書館 月報

NO. 742
FEBRUARY 2023

CONTENTS

- | | | | |
|----|---|----|---------------------------------------|
| 1 | 明治時代に描かれた器―『陶磁器意匠標本』―
今月の二冊 国立国会図書館の蔵書から | 21 | 館内スコープ
史と志をつなぐ |
| 5 | 林光の手稿譜を「読む」 吉田 宗彰 | 22 | 本屋にない本
『百香繚乱 高砂コレクション香りの図鑑
特別版』 |
| 13 | 日本図書館紀行 特別編
京都府立京都学・歴彩館 | 23 | N D L
T o p i c s |
| 14 | 京都府立京都学・歴彩館に勤務して
様々な寄贈資料にみる | | |
| 18 | 歴彩館の資料収集うらばなし | | |
| 25 | 数字で見る国立国会図書館 | | |



表紙：
「京都三條大橋」
橋口五葉 画 大正9（1920）年 1枚 38×53cm
（『橋口五葉版画集』所収）
<https://dl.ndl.go.jp/pid/2542911/1/4>

明治時代に描かれた器 —『陶磁器意匠標本』—

岩 寄 依 子



(右) 表紙。
(左) 冒頭に描かれた「大河内焼小鉢」。



陶磁器意匠標本

黒田政憲 著 大日本窯業協会事務所 明治28 25cm
<https://dl.ndl.go.jp/pid/1183838>

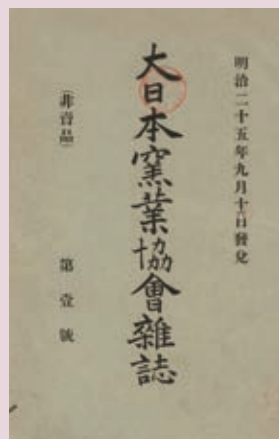
大河内焼、古九谷、伊部焼……小鉢や花瓶などの器の美しい図柄、精緻な平面図や側面図が並ぶ。本書は、『大日本窯業協会雑誌』に掲載された陶磁器の図案集であり、「意匠標本」を抜粋して刊行された。『大日本窯業協会雑誌』は明治25（1892）年6月に設立された大日本窯業協会の会誌である。

日本の陶磁器は、幕末に海外の万国博覧会で紹介されたことや、欧米におけるジャポニスム（日本美術に対する強い関心）の高まりにより、主要な輸出品となっていく。明治になっても日本政府は万国博覧会へ積極的に参加すると同時に、殖産興業政策のもと、西洋の技術を学び、物産の調査や研究を行った。また、内国勧業博覧会の開催や指導者の採用（お雇い外国人）、窯業教育機関の創設など、国内でも各種の政策が推し進められた。その結果、明治14（1881）年までは陶磁器の輸出額も右肩上がりに増えていく。

しかし、1880年代後半から1890年代前半には、陶磁器の輸出は停滞する。急激な輸出の増大により粗悪品が増え、日本製品の評価が下がったことや、海外市場ではそれまで輸出品の主流だった装飾品よりも実用品が求められるようになったことなどがその要因だった。こうした状況を受け、各地で同業組合の設立、技術の改良や生産体制の合理化



(上) 美しく彩られた「古九谷窯向付皿」。
(左) 見開きの折込図に描かれた「高麗皿」。



『大日本窯業協会雑誌』創刊号の表紙。『大日本窯業協会雑誌』は公益社団法人日本セラミックス協会の月刊英文論文誌として現在まで続いている。

『大日本窯業協会雑誌』1巻1号
大日本窯業協会 1892.9<請求記号 Z17-249>

が進められた。

その中で、窯業者の団結を図るため、東京職工学校と、同校が改組、拡充された東京工業学校（現・東京工業大学）陶器玻璃工科の卒業生および在学生が発起人となり、明治24（1891）年10月に東京で窯工会が設立される。彼らは、日本の窯業で指導的役割を果たしたドイツ人、ゴットフリート・ワグネル（Wagner, Gottfried 1831～1892）の教えを受けていた。窯工会では会誌『窯工会誌』の発行や講話の開催を通じて、全国の窯業関係者への情報提供に取り組んだ。その活動をさらに充実させるべく設立されたのが、大日本窯業協会である。

大日本窯業協会は、東京工業学校の関係者のほか、学者や実業家、製造業者が会員として名を連ね、いわば産学協同の組織となった。明治25（1892）年9月に創刊された『大日本窯業協会雑誌』（右上画像）では、毎月、研究者の報告などの技術情報のほか、地方の情報、商況などが掲載され、会員それぞれの知識や経験の共有が目指されている。中でも、意匠標本は『窯工会誌』にはなかったもので、大正9（1920）年8月まではほぼ毎号必ず掲載された。これには、遠方に住む者や文字解読が困難な者も含め、製造業者に対し、意匠標本によって陶磁器業の改善の具体的な目的



(上) (下)「菓子器」とその平面図。平面図には寸法も記載されている。



(上) ティーポットやカップの取っ手も数多く描かれている。
(下)「駒競御幸画卷裾紋」より。

を伝える意図があった。
本書の意匠標本は、創刊号から3巻36号(明治28(1895)年8月)に掲載された中より約20点が抜粋されまとめられている。会員の所蔵品や古典の模写、会員が考案した図案で構成されており、それらからは伝統的な日本、あるいはアジアの雰囲気that漂う。寸法など実際の製作に役立つ情報もあり、実用を意識したものとなっている。



「无礙菴」「常真居士」はそれぞれ今泉雄作の号であり、緑の印には「今泉雄作氏寄贈本」とある。

○参考文献 ※<>内は当館請求記号

外館和子 著『日本近現代陶芸史』阿部出版 2016<KB372-L76>

今給黎佳菜「近代日本陶磁器業における情報ネットワークの発展」『技術革新と社会変革現場基点 社会技術革新学会誌』6巻1号 2013 <http://s-innovation.org/doc/page2.cgi?id1=1412833194&id2=1412833385>

明治・大正時代の日本陶磁展実行委員会 編『明治・大正時代の日本陶磁 産業と工芸美術』明治・大正時代の日本陶磁展実行委員会 c2012<KB16-J1062>

長井千春・宮崎清「大日本窯業協会雑誌の意匠標本にみる陶磁器デザインの変遷」『デザイン学研究』54巻5号 日本デザイン学会 2008<Z11-1454>

山田雄久「明治中期における日本陶磁器業の情報戦略」『経済史再考 日本経済史研究所開所70周年記念論文集』徳永光俊・本多三郎 編 大阪経済大学日本経済史研究所、思文閣出版（製作・発売）2003<DC1-H3>

吉田千鶴子「今泉雄作伝」『五浦論叢 茨城大学五浦美術文化研究所紀要』6号 茨城大学五浦美術文化研究所 1999.9<Z11-2617>

日本輸出陶磁器史編纂委員会 編『日本輸出陶磁器史』名古屋陶磁器会館 1967<DL561-10>

『大日本窯業協会雑誌』1巻1号-3巻36号、27巻4号 大日本窯業協会 1892.9-1895.8、1918.12<Z17-249>

『窯工会誌』1-4号 窯工会 1891-1892<雑49-202>

※ URLの最終アクセス日：令和4年12月19日

※引用の旧字は新字にしました。

本書を編集した黒田政憲の肖像。陶器学校や工業学校の校長を歴任。その傍ら、クローズ・コーレマン『定量分析書』、カール・ランゲンベック『陶器製造化学』等の訳書や、『実用製陶学』『瀬戸の陶業』等の著書を出版し、日本の窯業の発展に尽力した。

『大日本窯業協会雑誌』27巻4号の冒頭には追悼の辞が掲載されており、人柄について「外は剛毅にして、内に熱血を蔵し」と記されている。本書には黒田の若き日の情熱が詰まっているとえよう。

『大日本窯業協会雑誌』27巻4号 大日本窯業協会 1918.12<請求記号 Z17-249>



なお本書を編集した黒田政憲（1870～1918）は、東京工業学校陶器玻璃工科の出身、ワグネルから直接教えを受けた一人だ。窯工会から続けての会員であり、本書刊行時には、農商務省地質調査所に勤めていた。本書を刊行した目的は、同時期に刊行された『大日本窯業協会雑誌』の記載からはわからない。奥付に「非売品」とあることから、刊行部数はそれほど多くなく、会員や関係者に向けて作られたものかもしれない。また、冒頭の図案に押された印は、明治・大正期の美術史家、鑑識家である今泉雄作（1850～1931）のものと思われる（左上画像）。今泉は明治27（1894）年に京都市美術工芸学校長に就いており、明治28

（1895）年の大日本窯業協会の第3回総会に第4回国産博覧会審査官の肩書で出席していた。本書はそういった会合で関係者に配布されたり、あるいは意匠の改善のため、美術家などに意見を求めるのに使われたりした可能性もある。『大日本窯業協会雑誌』には、年代が下るごとに海外製品の模写やモチーフを取り入れた意匠標本が掲載されていく。それらと比較すると、明治28年に刊行された本書の図案はまだまだ古典的な装飾品の趣を残しているように見える。しかし本書からは、日本の陶磁器をよいものにしようという関係者の静かな意気込みや、各図案をもとに作られたであろう陶磁器の美しさが確かに感じられる。

林光の手稿譜を「読む」

吉田 宗彰



令和 5 年 1 月 20 日、国立国会図書館東京本館音楽・映像資料室では林光コレクションの追加公開を行いました。林光氏（1931-2012）は、管弦楽曲、器楽曲、合唱曲、オペラ、映画音楽、音楽評論など多岐にわたる音楽活動で知られています。平成 27 年にご遺族から林氏の手稿譜及び作曲活動に関連する資料の寄贈を受け、平成 28 年 3 月に第 1 回目の公開を行いました。

手稿譜は、作曲家本人による自筆譜等の手書きの楽譜のことで、作曲家の創意思図や楽曲の創作過程をうかがい知ることができる貴重な資料です。また、このコレクションには手稿譜のほか、コピー譜、印刷譜、携わった舞台や映画、テレビ番組の脚本、パンフレット、チラシなどの関連資料も含まれています。今回の公開で手稿譜は合計 2,983 点、関連資料は合計 3,021 点となりました。

この機会に、手稿譜と関連資料の整理作業に携わった、現代音楽家の吉田宗彰氏に、林光コレクションの魅力についてご寄稿いただきました。

※林光コレクションの利用については、リサーチ・ナビ「手稿譜及びその関連資料」をご覧ください。
<https://rnavi.ndl.go.jp/jp/avmaterial/manuscript.html>

吉田 宗彰 氏

明治学院大学大学院で林淑姫氏に師事。専門は作曲および音楽学。現在オーストリアを中心に活動中。

林 光

(はやし ひかる 1931-2012)

作曲家。1953年《交響曲ト調》で芸術祭賞受賞。作品のジャンルは多岐にわたる。合唱曲《原爆小景》をはじめ、社会的メッセージをもった作品を数多く発表する一方、日本語と音楽との自然な結びつきを探究。日本語による歌芝居の上演を続ける「オペラシアターこんにゃく座」の芸術監督に就任、多くの創作オペラを残した。また1961年のモスクワ映画祭作曲賞を受賞した映画『裸の島』を含め、多くの新藤兼人監督作品で音楽を担当した。



撮影：伊藤 千里

手稿譜とは字義通り手書きの楽譜を指し、出版譜とは異なり定型化されていない場合が多い。この定型化されていないというのが厄介な点であり、また魅力的でもある。

「書かれた楽譜は、それ自体が『カリグラフィ』、『書』の性質を持つ。『……』そこには、作曲家の人格が、『思想』が、作品のスタイルとか作曲家の流派とかが、あらわれてしまう。」と林光（1931～2012）は述べているが（林 1981…

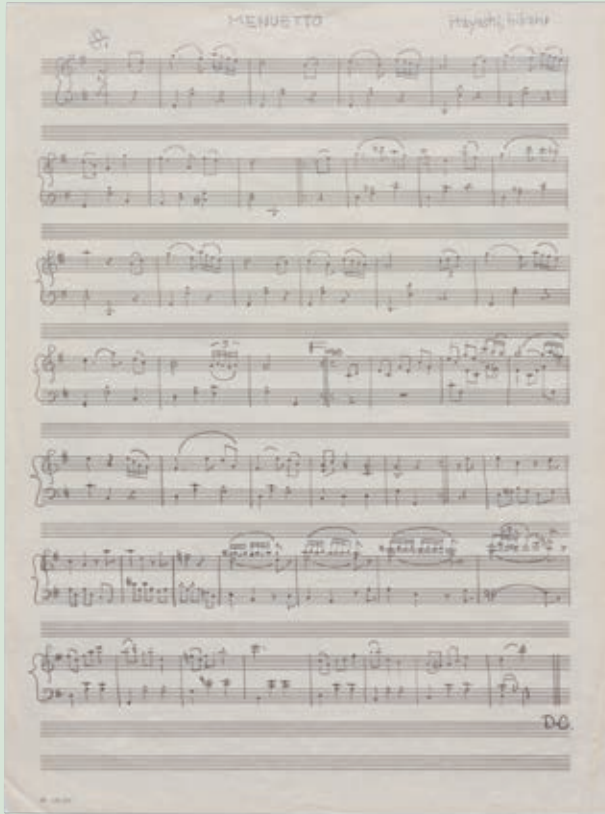
259頁）、印刷譜では捨象されがちなこれらの要素が演奏に大きく関与してくる場合も少なくない。そのため自筆譜を検討することは、演奏家にとっても大切な仕事になってくる。ちなみに、上記引用部に続いて、記譜の際に使用する筆記用具について「万年筆と鉛筆がベターでボールペンは、やや落ちる。」とあるが、彼の資料の中にはボールペンによって書かれた譜面も少なからず存在する。また様々な種類の五線紙が混在していることも多く、文房具を吟味する余裕すら無い執筆時の多忙な様

子がうかがえる。

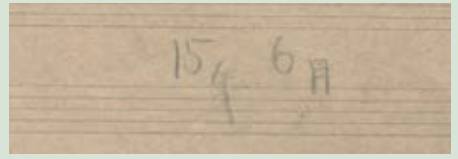
楽譜の特異性、換言すれば、活字の形で上梓される文学と異なる因子の一つは、譜面は音楽作品の発表の形ではないという点にある。そもそも楽譜とは中間生成物であり、その段階ではまだ音楽になっていない⁽¹⁾。しかしだからこそ、その中途段階のさらに手前にある手稿譜は、出版譜以上に、さまざまな可能性と示唆に富んでいるともいえる。

林は「印刷される作品（だけ）から、その作曲家の作風の全体像や、評価（重要度）をおしはかることが、かならずしも適切でない⁽²⁾」でも、しばしば出版譜が決定的な影響力をもつことを指摘したが（林 2013…7頁）、その一方で、出版されていない楽譜を見る機会が一般にきわめて限られていることは否定できない。手稿譜が作曲者や関係者の手元に残されていれば、アクセスが難航することもある。林の指摘を踏まえれば、公共施設がそれらを保存・公開することは、演奏家や研究者のみならず作曲家にとって、ひ

《メヌエット 長調》

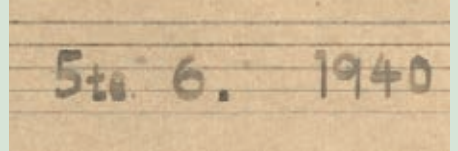


④「MENUETTO」< Y871-001-Ms-02167 >

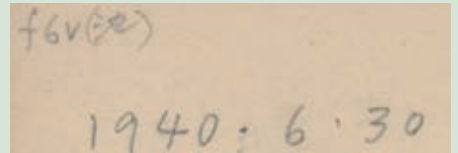


①「MENUETTE in G für KLAVIER SOLO」
< Y871-001-Ms-00306 >

※< >内は当館請求記号



②「Menuett in G dur für Klavier Solo」
< Y871-001-Ms-00307 >



③「Menuett」(注記「楽譜帳 1 光 作曲集 1」
収録)< Y871-001-Ms-02805 >

いては日本の現代音楽の振興にとつても好事である。

このたび公開された「林光コレクション」には児童期から晩年にいたるまでの資料が収められているが、作曲家資料でこれほど網羅的に収集されている例は珍しい。今回はその中から、初期の作品である《メヌエット 長調》と、林自身が「作曲家としてのほぼ全生涯にわたって、書きつがれた」(林 2001)と述べる《原爆小景》について一考したい。

メヌエット 長調

ピアノ独奏曲である《メヌエット 長調》は1940年に作曲され、尾高尚忠(1911~1951)に初めて指導を受けた曲とされている③。

9歳頃に書いたこの曲を、後年林は私的な集い等で度々自演していたらしく、また2006年には録音もしており、その演奏はCDとして残されている。この曲に関する資料の成立時期は大きく二分されている

る。つまり、作曲された1940年近辺に書かれたと思われるY871-001-Ms-00306(以下①)・Y871-001-Ms-00307(以下②)・Y871-001-Ms-02805(以下③)、そしてかなり時代が下ってから浄書されたY871-001-Ms-02167(以下④)が存在する。最後の一点は使用された五線紙からして前の三点との年代の違いは明らかだが、この古い方三点が書かれた順番を特定するのがなかなか難しい。

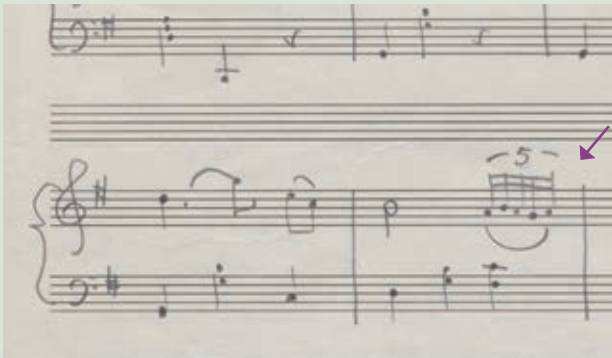
手始めに楽譜に書かれている日付を見ると、③の当該ページ④には「1940・6・30」、①には「15年6月」②には「5te 6・1940」とそれぞれ記載がある。①の「15年」は昭和15年と考えれば1940年と一致するので都合がいい。このようなおざなりで場当たり的な判断の是非はともかくとして、続いて内容の比較に移る。この四つの楽譜にはそれぞれほぼ同じことが書かれているのだが、いくつか異なる箇所があるので、その中の一点を注視して検討を加える。



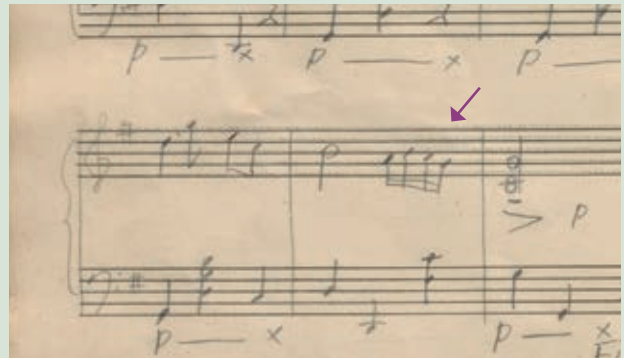
② Y871-001-Ms-00307 (5 連符)



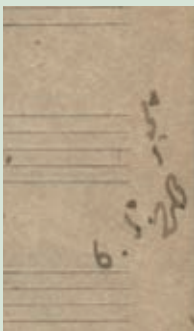
① Y871-001-Ms-00306 (16 分音符)



④ Y871-001-Ms-02167 (5 連符)

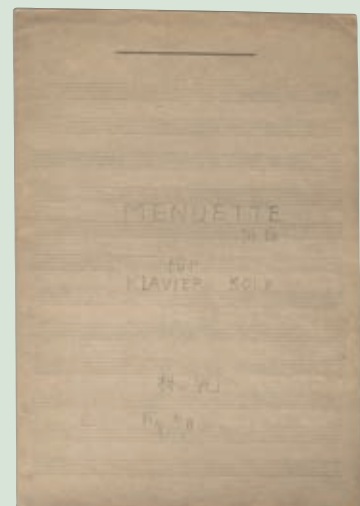
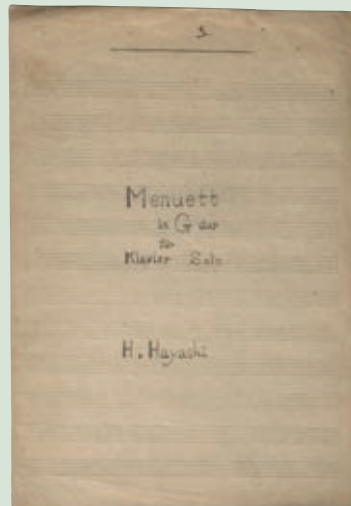


③ Y871-001-Ms-02805 (16 分音符)



① Y871-001-Ms-00306 (末尾)

右から①②のタイトルページ、③の表紙



後年に書かれた④の第19小節
〔Fine〕と書かれている小節の一つ
前)の3拍目を見てみると、5連符
が置かれている。一方、古い三点
の楽譜の同箇所は、①では16分音

符、③も16分音符、②では5連符
となっている。困ったことになっ
た。普通に考えれば、最初に書かれ
たものから最も若い④に向かって順
に変更が加えられていくはずなの
で、初期の構想では16分音符であつ
たが推敲した結果5連符とした、と
なる。しかしそうなってくると「5
te 6・1940」と書かれている
②が古い三点の資料の内で最後に作
成されたことになってしまう。①の
「15年6月」はいいとしても、③の
「1940・6・30」とは辻褄が合わ
ない。そこでこの矛盾を解消する道
筋をいくつか考案してみる。

一つの可能性としては、散々熟慮
して様々なアイデアを出したが、結
局最初の案が採用になったという
ケースが考えられる。これならば日
付通りの順に書かれたとして問題は
ない。もしかしたら、最初は5連符

で書いていたところに尾高先生の添
削が入り16分音符に修正した(され
た?)が、後年ほどぼりが冷めた頃
に元の自分の案にそつと戻したのか
もしれない。

一方で、日付が正確でない、もし
くはそれが筆記した日ではなく別
の日を表しているという可能性もあ
る。そこでそれぞれの資料の日付部
分を改めて見てみると、②では音符
や注記等と同時に書かれたような印
象を受けるが、③の「1940・6・
30」は記譜部分とは別の時期に書
かれたような感がなくもない^⑧。後
者の資料は、表紙に「光作品集Ⅰ」
と書かれた初期の楽譜帳(曲集)
であるが、これを後に本人が整理
をした際、記憶や日記等を頼りに
年月日を書き込んだのだとすると、
「1940・6・30」の信憑性は幾分
低下する。さらに、この楽譜帳には
作曲家以外の人物によって筆記され
た箇所が含まれているとの指摘もあ
る^⑨。そうなるとこの日付はもはやほ
んどあてにならない。

①をよく見てみると、末尾に後

から書き込まれたとみられる「6・
5??」(??は判読不能)と読め
そうなメモがあるが(右頁3段目)、
ここまで来たからにはこれが6月5
日を指すもの⁽¹⁰⁾としよう。それなら②
と一致する。一方で②は全体の筆跡
から清書として作成されたものであ
ると類推できる。すると考えられる
のは、6月5日に16分音符版を書
き、追ってそれを5連符へと変更
し、それがその後浄書され②が成立
したが、そこには筆記した日付や
5連符版へ改訂した日付ではなく、
当初の作曲日として「5te 6・
1940」を記した、という説であ
る。これならば道理にかなう。

個人的には、添削を元に戻したと
いう案を推したいところだが、各楽
譜間のその他の差異を比較してみても
どうやら空振りらしい。これらの
資料だけでは一義的な見解にたどり
着けないが、どうも林少年は紆余曲
折を経ずに16分音符→5連符と順当
に進んだようだ。

原爆小景

無伴奏合唱曲《原爆小景》の成立過程について、林は第三部までを書き終えた数年後に以下のように書いている。

『原爆小景』の第1部「水ヲ下サイ」は1958年に、第2部「日ノ暮レチカク」第3部「夜」は1971年にかいた。この間、13年の月日経っているし、原民喜の詩「原爆小景」をはじめて読んだ1951年からかぞえれば20年が経過している。(林1975)

彼は事あるごとに、原民喜(1905-1951)の詩集『原爆小景』の最後の一篇である「永遠のみどり」の作曲に挑戦してはいたものの、なかなか完成には至らなかった。しかしついに2001年に《原爆小景》の第四部として発表され、この合唱組曲は「完結版」となる。作曲者はこの曲の各部をそれぞれ、第一部の「主要部分は変口短調

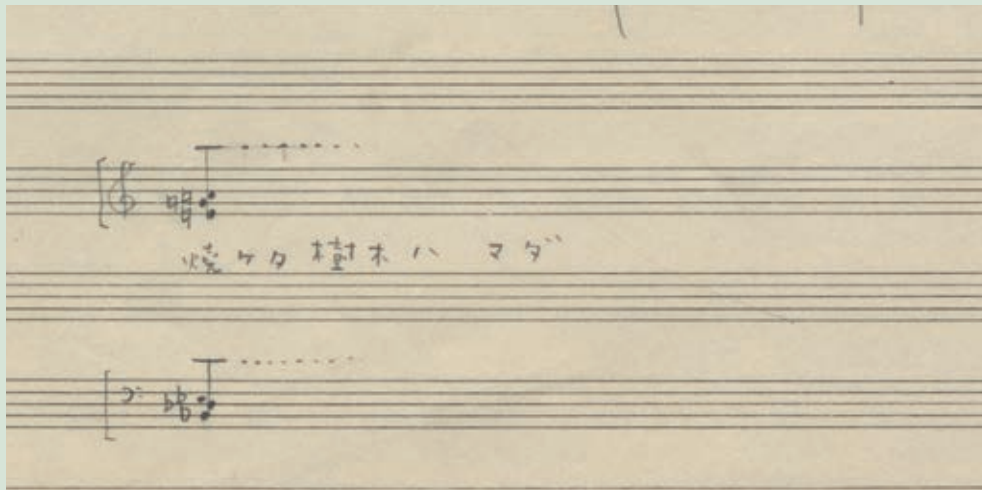
の調性が確保」されており、第二部と第三部では「作風が一変して、トーンクラスターおよび《音列作法》によらない》自由で不規則な無調音楽とが混在」し、第四部では「ふたたび調性の世界があらわれる」、としている(林2001⁽¹⁾)。

第三部〈夜〉は、九篇からなる『原爆小景』のうち「水ヲ下サイ」を含む六篇と、原の小説『鎮魂歌』からの抜粋で構成されている。この第三部のものと思われる草稿(Y871-001-MS-02331)を見つみると、そこには先に記した林の説明とは異なり、音列作法ないしはそれに類する手法を試みた形跡が残っている。しかしここに書かれている素材がそのまま楽曲中に登場することはない。一方、この音列に基く和音が書かれた別の草稿(Y871-001-MS-02332)には、「焼ケタ樹木ハマダ」という『原爆小景』の一篇の冒頭部分が記載されているが、これもこの合唱組曲には使われていない。ということは、当初は、音列作法による「焼ケタ樹木ハマダ」を第三部に組込む案があった

《原爆小景》

「ゲンバク」 < Y871-001-Ms-02331 >
p.7 より

「ゲンバクメモ」 < Y871-001-Ms-02332 >
p.6 より



のかもしれない。このように手稿譜は、できあがった曲からはわからない作曲経緯の一端をほのめかすこともある。

前述のとおり林は、続く第四部（永遠のみどり）の作曲をなかなか進めることが出来なかった。その理由のひとつとして彼は、『原爆小景』が「社会参加の音楽」というふうに受け取られていったことを挙げている。（水ヲ下サイ）の作曲は林にとって「徹頭徹尾、個人的な行為でしかなかった」が、だからこそ「あの冷たく重いことばを、二週間ほどのかぎられた期間でうごかすこと」ができた（林1979…294頁）。しかし「社会参加の音楽」としての『原爆小景』に新しく曲を加えようとする

き、彼は「核の恐怖がなにひとつ解決していない今、『ヒロシマのデルタに若葉うづまけ』⁽¹⁾⁽²⁾などという詩句に作曲することが可能だろうか」（林1975）という問いと向き合わないわけにはいかなかったのである。

『原爆小景』のみならず林は「社会参加の音楽」を多数書いてきた。その時代の問題を見据え、時にはそれに追いついていられながらも作曲に向かう佇まいを、その自筆譜の筆致から気色取ることができよう。

ここまで二作品について正式な手続きも踏まず夢想に近い無責任なことを列挙してきたが、この中に正解があるかもしれないし、全て見当違いかもしれない。その判断は今後の研究にゆだねたい。

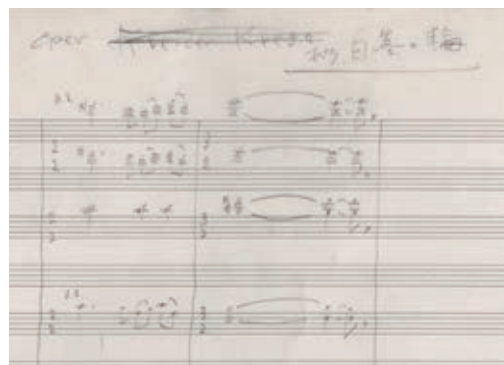
林光のオペラ

林光は時代や社会に厳しく対峙して多岐にわたる音楽活動を行い、さまざまなジャンルの作品を数多く残したが、中でもオペラは、日本語オペラの領域に新たな展開をもたらしたという観点で重要である。ここでは二つの作品を紹介する。

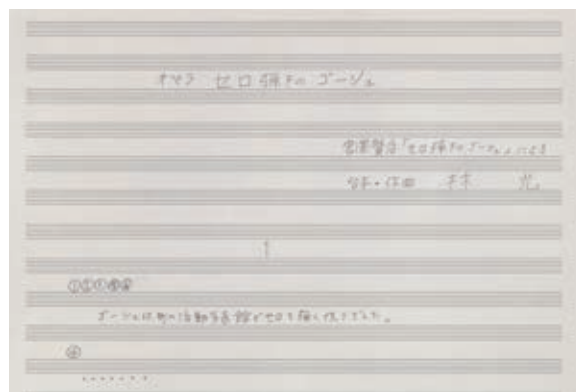
「Oper オペラ 白墨の輪」 < Y871-001-Ms-02304 >

《白墨の輪》はベルトルト・ブレヒト（1898-1956）の戯曲『コーカサスの白墨の輪』に基づくオペラ。消された文字はタイトルのドイツ語表記を意図したものである。

《白墨の輪》



《セロ弾きのゴーシュ》



「オペラ セロ弾きのゴーシュ 宮澤賢治「セロ弾きのゴーシュ」による」 < Y871-001-Ms-00071 >

これはオペラの楽譜だが、『セロ弾きのゴーシュ』を題材にした林の音楽はほかにもある。

「ゴーシュノート」 < Y871-001-Ms-02287 >

表紙に『ゴーシュノート [1]』と書かれたルーズリーフ束の内の一枚。推敲の跡が見られる。

■注

- 1 これに関しては議論の余地があると思うが、今回はそこに立ち入るのはご容赦いただきたい。
- 2 尾高尚忠は作曲家、指揮者で、1930年代にヨーロッパで音楽を学んだ。彼がオーストリアから帰国したのは1940年6月なので、その直後から林少年にレッスンをしていたことになる。
- 3 林光『ピアノの本』（2006年録音）林光（ピアノ）AKADENSHA/ コジマ録音：ADS-6、2006年発売、CD
- 4 この資料は、『メヌエット長調』以外にも数曲が記載された一冊の楽譜帳となっている。
- 5 「年」と「月」は後で書き足されたように見える。
- 6 1940年6月5日
- 7 Y871-001-Ms-02167に日付の記載はない。
- 8 その上にある「f6v（池）」は林の没後に資料を整理した際、作業者によって書き込まれたもの。
- 9 母親が光少年のために、彼の作品を筆写、清書したという説もある。この楽譜帳では『メヌエット長調』を含めいくつかの曲で、譜面の書き方がやや不自然なところもあり、作曲家自身の筆によっていない部分が混在している可能性が高い。前後の作品に付され

た日付に鑑みると、これが書写日を指すとも考えにくい、この資料の成立環境については不明点が多いので、これ以上の言及は控えたい。

10 記譜部とは異なる筆記用具が用いられている。

11 ここで林は、第一部の主要部分と第四部には長調や短調といった伝統的な調の感覚があるが、第二部と第三部はそうではないと述べている。「クラスター（トーンクラスター）」とは、全音や半音、もしくはさらに狭い音程間隔で密集した音の塊を指し、「音列作法」は、任意の音列に基く楽曲構成法で、どちらも20世紀の音楽の手法。

12 〈永遠のみどり〉の冒頭部。

■参考文献

- 林光 1975 『終わらない主題の終り』1975年10月30日の演奏会のパンフレット
東京混声合唱団第70回定期演奏会 東京文化会館小ホール
- 1979 『ひとりのゴーシュとして』東京：一ツ橋書房
- 1981 『音楽のつくりかた 林光 仕事日記』東京：晶文社
- 2001 演奏会プログラムの曲目解説 林光・東渥八月のまつり No.22 2001年8月9日 カザルスホール
- 2013 『現代作曲家探訪記 楽譜からのぞく世界』東京：ヤマハミュージックメディア



南北に細長い建物の南西面（奥に見えるのは京都を代表する山の一つ、比叡山）

京都府立京都学・歴彩館



街灯の点いた西側の舗装路

東寺百合文書をはじめとする一級文書の所蔵でも知られる京都府立京都学・歴彩館は、図書館として文書館として、ユニークな立ち位置にあります。

同館は、どのように資料を収集してきたのでしょうか。

国立国会図書館から同館に向向している職員に加え、前身の京都府立総合資料館時代から40年近く資料の寄贈に携わってきた職員の特別寄稿から、資料と人が出会うことの醍醐味を探ります。

京都府立京都学・歴史館に勤務して

加藤 大地

(京都府立京都学・歴史館 資料課)



ありし日の総合資料館（今も建物はそのまま残っている。）

お膝元の京都でもまだあまり耳馴染みのない京都府立京都学・歴史館が誕生したのは平成28（2016）年12月のこと。それまで約半世紀にわたり京都に関する資料を総合的に収集し、保存し、公開してきたのは京都府立総合資料館でしたが、老朽化と収蔵対策のため同館を新たに組み換え、京都府立大学と連携しながら京都の歴史・文化に関する研究支援や学習、交流の拠点とすべく京都学・歴史館は誕生しました。場所はかつての総合資料館からほんの100mほど南に下がったところ、府立大学附属図書館や同文学部と建屋を共有する複合的な施設です。近くには他にも学校がいくつかあり、また隣にはコンサートホールや京都府立植物園があるなど、辺り一帯は落ち着いた

文教地区と言えます。その一角を占める歴史館の2階に京都資料総合閲覧室があり、旧館から引き継いだ資料はそこで利用することができます。

筆者は令和3～4年度の2年間をここで過ごす機会を得ました。

歴史館には多様な資料がありますが、大別すると古文書、公文書、それに図書や雑誌・新聞等の出版物に分けられます。

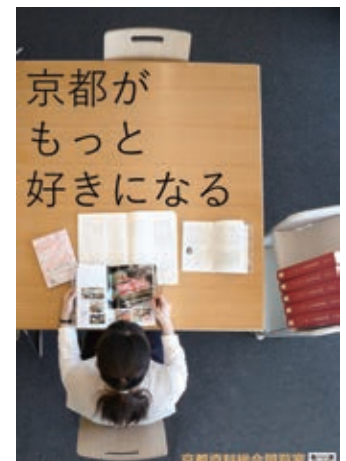
古文書には、国宝であり、ユネスコの「世界の記憶」にも登録されている東寺百合文書を筆頭に、京都に伝わる文書などがあります。公文書は京都府が明治以降、連綿と作成してきたもので、昭和21年以前のもものは国の重要文化財に指定されています。何れも第一級の資料（史料）です。



2階京都資料総合閲覧室の入口



東寺百合文書 WEB トップページ。国宝の文書をデジタル画像で見ることができる。<https://hyakugo.pref.kyoto.lg.jp/>



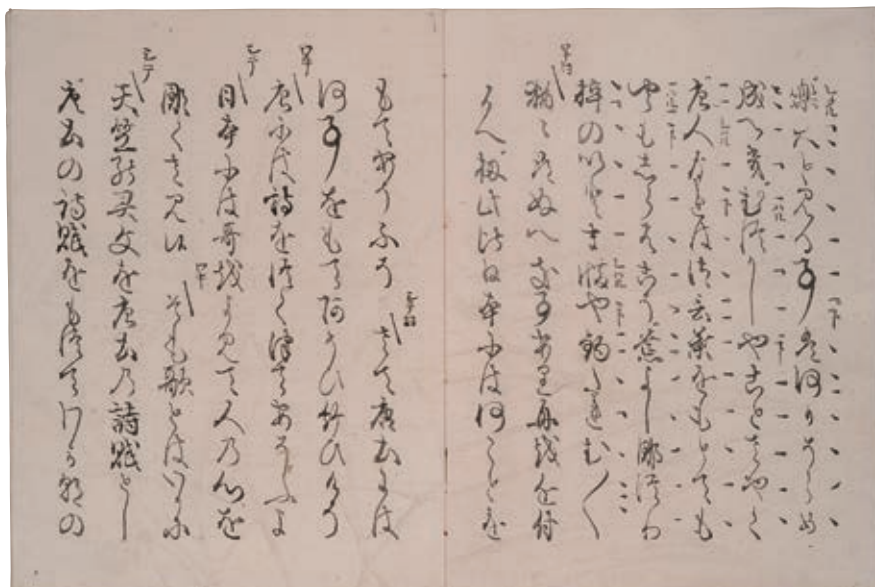
館内に掲示されたポスターが訪れる利用者の足を2階の閲覧室へと誘う。



行政文書の一例。「叡山電気鉄道一件（大正13年度）」

(右)『平家物語 卷第二』冒頭 語り本の八坂流系統のなかで、古い形態をとどめる屋代本。

(下) 古活字による『白楽天』。印刷された京都の地に因んで嵯峨本と呼ばれる。



そして出版物です。これには、いわゆる古典籍も含まれ、中には書誌学的・文献学的にみて重要なものがあります。一例をあげれば、平家物語の伝本の一つである室町時代の屋代本、江戸初期に出版された古活字本、京都の地誌や地図などです。

こうした数々の貴重な資料を当館ではデジタル化し、「京の記憶アーカイブ」というデジタルアーカイブを中心にインターネットで公開しています。

更に、去年の10月からはその一部について国立国会図書館と連携し、ジャパンサーチからも検索・利用できるようになりました。これまで以上に多くの方の目にふれ、当館の資料に親しんでいただくきっかけとなれば幸いです。

それ以外にも多種多様の資料を所蔵しています。京都府内で発行された新聞や雑誌、京都に関連する図書はもちろん、府内の自治体や各種団体の刊行物、記念誌、地図等々。中には学校の卒業アルバムのような写真帖やパンフレット、手書きの原稿などもあり、まさに前身である総合資料館の名のとおり、とても多彩で厚みのある蔵書です。

旧館開館以来、営々と築き上げてきた

これらの蔵書が今の京都学・歴史館を支える屋台骨です。

ところで、当館を支えるもう一つの大切なものに出向中、気が付きました。屋台骨と相まって歴史館を「生きた」建物たらしめているものなのですが、それが人です。

職員は、所蔵すべき資料がないか細大漏らさぬよう新刊から古書まで幅広く見渡し、必要とあらば著者や出版社等に連絡して寄贈を依頼したり、古書を買付けたりします。また、いったん蔵書に加えた後は格別の愛情をもって資料を扱い、できるだけ永く良好な状態で保存し、受け継いでいくために補修など必要な手を加えます。資料に通じる職員を育む風土がここにはあり、それは紛れもなく当館のもう一つの財です。

そして利用者もまた、この列に加わって歴史館を支えている存在です。古文書にせよ公文書にせよ出版物にせよ、資料を尊重し、熱心に読む利用者の姿を幾度となく目にしました。

資料と職員・利用者の幸福な関係、それはどの図書館や文書館等にとっても同じだと思いますが、一朝一夕に成立するものではありません。ここ京都にそれを



デジタル化風景。国文学研究資料館と協働で毎年少しずつデジタル化を進めている。



(上) 京の記憶アーカイブ「簡易検索」。出版物や文書等が検索できる当館のデジタルアーカイブ。<http://www.archives.kyoto.jp/>
(下) ジャパンサーチからも京の記憶アーカイブ（一部）が検索・利用できるようになった。<https://jpsearch.go.jp/database/kyoto>



(上) 資料の補修に使われる道具の数々
(右) 所蔵資料を紹介する恒例の「資料に親しむ会」風景。筆者も令和4年6月に講師を務めた。



実現している館があることを間近に見ることができたのは、誠に貴重な体験でした。

様々な寄贈資料にみる

歴彩館の資料収集うらばなし

松田 万智子

(京都府立京都学・歴彩館 資料課)

最近寄贈いただいた華道関係の資料



今から40年程前、筆者が京都府立京都学・歴彩館（以後、「歴彩館」という。）の前身の京都府立総合資料館（以後、「資料館」という。）の閲覧担当に配属されて最初に覚えた仕事は、冊子体で刊行されていた週刊の『日本全国書誌』を見て、担当する主題の非市販資料をチェックし、寄贈依頼をすることでした。また、先輩には「我々の仕事は古紙回収業である」とも教えられました。蔵書家の御遺族や旧家の御当主から「資料館で役に立つものがあれば寄贈したい」という申し出を受けて、資料収集のために参上することを古紙回収業と称したものです。大量の資料に圧倒されたり、旧家の蔵でネズミに先を越されて悔しい思いをしたりと悲喜こもごもの収集業ですが、事程左様に、歴彩館の蔵書の一番の特徴は「寄贈資料が多い」という一言に尽きます。

例えば、京都市立名譽教授の故吉田光

邦氏旧蔵の吉田文庫は、3万3千冊の図書・雑誌に加えて現物資料も含まれる一大コレクションです。他にも元京都府知事の故蜷川虎三氏旧蔵の蜷川統計学文庫や、俳諧書の松宇文庫旧蔵資料など特色ある寄贈資料は枚挙にいとまがありません。

文化勲章を受賞された京都の日本画家、池田遙邨（1895～1988年）氏とその御遺族からも、大量の資料の寄贈を受けています。筆者は、遙邨氏の没後に寄贈された資料の受け入れを担当しました。複本調査（当時はカード目録でした）に始まる一連の作業に奮闘したことは若き日の懐かしい思い出です。

この遙邨氏の旧蔵資料の中に、ぜひ御紹介したい二つの資料があります。『震災スケッチ』という絵はがき集と土田麦僊の『麦僊画集』の特装版です。

まず『震災スケッチ』は、関東大震災の発生直後に洋画家の鹿子木孟郎に誘わ





『麦僂畫集 [特装版]』(土田麦僂画) 扉には麦僂白筆の署名と落款がある。



『震災スケッチ』池田遙村(後に雅号を「遙邨」と改めた。)

れて被災地に赴き、その惨状をスケッチした作品を絵はがきにしましたものです。報道画家とでもいふべき責務を感じての行動で、このスケッチ画の展覧会が京都や東京で開催されました。『震災スケッチ』は、この展覧会の会場で販売されたものかと思われます。芸術的な評価はもとより、関東大震災の記録としても貴重なものであるといえるでしょう。ただ、寄贈を受けた時点では、筆者にとって関東大震災とは、遠い過去の出来事であり、他の作品とは趣が異なる暗いイメージの作品という認識でしかありませんでした。しかし、1995年の阪神・淡路大震災を体験したことで、絵はがきに秘められた遙邨氏等の思いと行動をようやく理解できるようになり、改めて敬意を表した次第です。

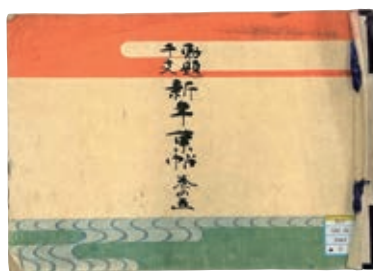
次に『麦僂畫集』は、普及版も所蔵していましたが、遙邨氏旧蔵資料は特装版で、越前和紙を使用、口絵の舞妓は精緻な木版画で、価格は38円、これは当時の小学校教員の初任給程の値段でした。直接申込者には「自署」とあり、麦僂のサインと落款も押されています。

1992年のある日のこと、筆者はこの『麦僂畫集』の所蔵調査のレファレン

スを受けました。依頼者は大塚融氏で、口絵の摺師、大岩徳蔵氏の御息から「幼い日にみた舞妓の絵を見たい」との依頼を受けての問い合わせでした。特装版の『麦僂畫集』をご覧いただいたところ、大岩氏の記憶に残る舞妓はまさにこの舞妓で「冥途の土産になった」と、大変喜んでいただきました。このように、利用者から、我々には思いもよらない資料の値打ちを教えられることもしばしばあります。

これらの遙邨氏の旧蔵資料にまつわるエピソード、つまり、歴史的な出来事や利用者との出会いの中で資料の魅力を発見し、教えられたことなどを紹介したいと思い、『総合資料館だより』に「館蔵資料紹介 池田遙邨氏旧蔵資料」を執筆し、大塚氏にお送りしたことがきっかけで、また次のレファレンスをいただくことになりました。

そのレファレンスとは「小西大東」という、洒落のような名前の謎の人物についての調査依頼でした。児島嘉一氏が所蔵されている『商工祭豊公入場列絵巻』(後日、大阪城天守閣に寄贈)にある「平安 歌屋大東」について、どのような人物か「平安」京都の資料館ならわかるの



『新年菓帖 勅題干支 巻の5』(小西大東編)



では」と期待されてのお尋ねでした。「歌屋」は号で、児島氏の元には小西大東こにしだいとうからの書簡も残されていました。

「京都の資料館なら」という期待とは裏腹に、調査は難航しました。唯一『京都府紳士名鑑』(1917年刊)に、「実業新聞社長」と記載がありました。当初は「実業新聞」についても住所以外の

詳しいことは不明でした。『京都出版史』に木版の菓子図案帖である『新年菓帖 勅題干支』の著者と記載されていることなど、僅かな手がかりを辿りつつ資料に

あたり、何人もの方にインタビューを重ねながら調査を進め、おぼろげながらも人物像が浮かび上がった頃、ある事実が判明します。資料館に所蔵する『新年菓帖 勅題干支』が、実は小西大東の旧蔵

資料で、大東の甥にあたる方からの寄贈資料だったのです。書庫の中で資料を確認すると、以前は目に入っていなかった

「歌屋」の印が押されていることに気がつき、鳥肌がたったことを今でも鮮明に覚えています。その後も、調べれば調べるほど次々に新たな事実が判明し、その過程で多くの人々と出会いました。現代に生きる人々はもちろん、大東と同時代

の京都に生きた人々との巡り合いも含まれています。池田遙邨氏の旧蔵資料が縁で大塚融氏と出会い、小西大東と出会ったことは、筆者の人生を大きく変える出来事となりました。(一連の調査の記録は『資料館紀要』に5回に亘って連載しています。)

このように、歴彩館での業務は、資料と人との出会いの連続で、時にはエキサイティングな出会いが平凡な日常に彩りを与えてくれます。まさに、歴彩館で働く醍醐味であるといえるでしょう。

さて本来、歴彩館ならではの資料との出会いを享受いただく主人公は、ここにはない資料を探し求めて来館される利用者の皆さまです。その出会いを取り持つために、職員は日々、資料収集に励んでいます。現在は、華道資料の収集家の御遺族から寄贈された、およそ2100冊におよぶ古典籍を中心とする華道資料の受入作業が一段落したところです。拙稿が掲載される頃には閲覧提供できる予定で、当館展示室での展覧会も予定していますので、機会があればぜひ資料に会いに来ていただければ幸いです。

問題です。「牛津大学」とは、どの大学のことでしょうか。漢字にとらわれてはいけません。現在中国語で用いられる表記ですが、近代の日本でも使われました。

憲政資料室では、近現代の日本の政治家や官僚の個人文書等を収集し、研究者等が利用できるよう、整理した後に提供しています。資料の公開に向けて資料リストを作るために、現物に触れたり参考情報を確認したりするとき、当時の言葉遣いや社会のありようを再発見することもあります。

先ほどの問題の答え合わせをしましょう。牛はox、津はford。つまり、英国のオックスフォード大学のことです。この表記は、明治時代に留学等で英国と関わりがあった人物の手紙から見つけました。近代化と国際化に取り組もうとするかつての日本人の姿が浮かびます。

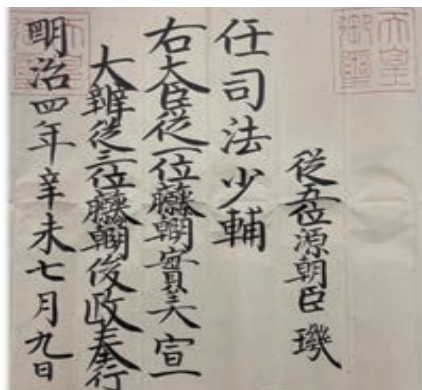
さて、私たちの業務は昔々の資料にとらめっこするばかりではありません。なぜなら、これら「憲政資料」は主に個人や団体から当館へご寄贈いただいた資料で構成されており、そのような方々との連絡や手続き等の対応もあるからです。出版者

からの納本に加えて、個人からの寄贈も当館の資料収集の重要な機会といえます。

ご先祖の資料を適切な機関に寄贈したいとお考えで、ご子孫が当館へお声掛けくださることもあります。資料をお引き受けするときに、元の持ち主についてのお話を伺ったり、資料が遺されたいきさつを教えていただいたりすることもあります。中には、寄贈手続き書類への押印のために、ご自宅で大切になさっている判子を使ってくださいることもあります。資料は寄贈者にとっても大切なものであり、その上で広く活用してほしいのご意思に報いることができたいと思います。

憲政資料室の始まりは、国立国会図書館が開館して間もない昭和24年9月。戦前から続く歴史資料の収集を引き継ぐとともに、それらの資料の散逸を防ぐ意図で設置されました。時代は下り、いまや昭和どころか平成でさえ歴史になりつつあります。それでも代々の担当者と変わらず、資料だけでなく資料室の目的や志を受け継ぐよう努めています。

（政治史料課憲政資料係 のりまさ）



憲政資料室所蔵資料の例 辞令（任司法少輔）
＜尖戸璣関係文書（その2）123＞

史と志をつなぐ



本屋に ない 本



百香繚乱 高砂コレクション 香りの図鑑 特別版

富田章・森谷美保 監修
高砂香料工業株式会社 刊
2020.2
191p 図版 [16] 枚 ; 26cm
<請求記号 KB16-M384>

香りとは鼻で楽しむものである。しかし、香りとの「出会い」においては、目も重要な役割を担う。私たちが偶然出会う香りは、たいていの場合ま

点が写真付きで解説されている。ペー
ジをめくると、香りにまつわるさまざ
まな道具が、まさに百花繚乱のごとく
色鮮やかに咲き乱れ、眺めているだけ
でも心の踊る一冊である。

コーヒーの香りが漂ってくる至福の瞬
間！)。一方で、意図的に香水などの
未知の香りと出会うときは、容器のデ
ザイン、説明書きなどの視覚情報がそ
のきっかけになるものだ。

本書で紹介されているコレクション
は、紀元前10世紀キプロスの古代土器
「彩文注酒器形香油壺」に始まる。当
時の香り文化の中心であった香油は、
宗教的儀式などに用いられ、また王や
貴族の間では、嗜好品、化粧品として
も好まれたと考えられている。古代メ
ソポタミアでのガラスの発明の後、紀
元前後頃に吹きガラス製法が発明され
ると、ガラス製品の生産が増大し、ロー
マ帝国の交易品としても重要な役割を
果たした。時は進み17・18世紀になる

今回は、目で香りとの出会いを楽し
んでいただくために、『百香繚乱 高
砂コレクション香りの図鑑 特別版』
をご紹介します。本書は、2020年、
高砂香料工業株式会社の創業100周
年を記念して刊行されたもので、同社
の「高砂コレクション」のうち236

と、アルコール抽出法の発展により香
水文化が広まり、その容器も多様化し
た。たとえば、当時流行した携帯用香
水瓶の一つで、観劇用望遠鏡の機能を
備えたカットガラス香水瓶などは発想
が面白い。室内用のものでは、色ガラ
スに金彩の文様が描かれたボヘミア
ン・ガラスの香水瓶は、形状、色合い
のコントラストが実に美しい。19・20
世紀になるとアール・ヌーヴォー、アー
ル・デコの対照的な美術様式が流行
し、香水瓶もその影響を受けたものが
多い。中でもルネ・ラリック(1860
〜1945)作品のデザイン性の高さは、
本書の中でも圧倒的な存在感を
放っている。当時のカタログ・ポスター
なども紹介されており、現代でもつい

買いたくなるような可愛らしい香水瓶
が描かれている。

日本のコレクションとしては、江戸
時代以降の香箱や香炉などが紹介され
ている。たとえば、寝ている間に香を
焚いて髪に香りを付けるという工夫が
施された香枕や、立体的・豪華な装飾
が西欧で人気を博した芝山細工の香
炉、桃色・青色など鮮やかな色があし
らわれた「七宝花鳥文香炉」などの作
品がある。また、香道伝書などの日本
の香り文化を知る上で貴重な資料も紹
介されている。

香りの文化・歴史が凝縮された贅沢
な一冊であり、ぜひ手に取って、古く
から香りを楽しんできた人々の息遣い
を感じていただきたい。(西村葉純)

国立国会図書館は、法律によって定められた納本制度により、日本国内の出版物を広く収集しています。
このコーナーでは、主として取次店を通さない国内出版物を取り上げて、ご紹介します。

NDL Topics

令和4年度国際政策セミナー「格差、分配、経済成長」

国立国会図書館では、格差、分配、経済成長をテーマとした国際政策セミナーを開催します。世界的に著名な経済学者で格差問題の第一人者であるデブラジ・レイ (Prof. Debraj Ray) ニューヨーク大学教授による基調講演「所得分配とユニバーサル・ベーシック・インカム」の未来（仮題）と、田中隆一（東京大学教授）による解説、専門家とのパネルディスカッションを通じて、我が国の課題を考察します。

○日時 令和5年3月15日（水）14時～17時

○開催方法 オンライン開催（Cisco Webex 使用）

○プログラム

〔基調講演〕

デブラジ・レイ氏（ニューヨーク大学経済学部教授（録画））

〔パネルディスカッション〕

・コーディネーター

田中隆一氏（東京大学社会科学研究所教授・国立国会図書館客員調査員）

・パネリスト

小塩隆士氏（一橋大学経済研究所教授）

森口千晶氏（一橋大学経済研究所教授（予定））

○申込方法 ホームページ「イベント・展示情報」に開設する申込ページから令和5年3月14日（火）までにお申し込みください。

○募集人数 300名程度（申込先着順）

○問合せ先 調査及び立法考査局 調査企画課 連携協力室
メールアドレス ml-tpseminar@ndl.go.jp

中国国家図書館とのオンライン業務交流

令和4年11月30日に中国国家図書館（NLC）との業務交流をオンライン形式で実施しました。

両館の館長による会談後、当館からは、資料デジタル化とOCR全文テキスト化が可能にする図書館サービスの拡充と今後の展望について、NLCからは、同館のデジタルリソースのナレッジ化の推進についてそれぞれ報告し、両館で質疑応答や意見交換を行いました。



児童書総合目録の終了について

これまで国立国会図書館サーチを通じて提供してきました、国立国会図書館及び日本国内で児童書を所蔵する主要縁機関7機関（大阪府立中央図書館国際児童文学館、神奈川近代文学館、三康文化研究所附属三康図書館、日本近代文学館、東京都立多摩図書館、梅花女子大学図書館、白百合女子大学図書館）が所蔵する児童書・関連資料の所蔵情報からなる児童書総合目録の提供を、令和5年3月に終了します。長年にわたリご利用いただき、ありがとうございました。

今後は、児童書総合目録参加館及び児童書を所蔵する他の機関との連携は、国立国会図書館サーチとの個別連携等に移行します。引き続き、国立国会図書館サーチの資料種別「児童書」から検索できますので、どうぞご利用ください。

○問合せ先

・児童書総合目録について

国際子ども図書館資料情報課情報サービス係

電話 03(3827)2053（代表）

・国立国会図書館サーチの技術仕様等について

国立国会図書館ホームページのお問い合わせフォームをご利用ください。

第37回納本制度審議会

11月25日、第37回納本制度審議会が開催され、審議会委員9名が出席しました。

審議会では、委員の交代（令和4年7月1日付）、出版物納入状況及び有償等オンライン資料の制度収集開始に向けた進捗について報告を行い、質疑応答がありました。

納本制度審議会委員名簿

（五十音順 敬称略）（令和4年7月1日現在）

会長

齋藤 誠

東京大学大学院法学政治学研究科教授

会長代理

植村 八潮

専修大学文学部教授

委員

伊藤 真

弁護士

江上 節子

武蔵大学名誉教授

江草 貞治

株式会社有斐閣代表取締役社長

奥邨 弘司

慶應義塾大学大学院法務研究科教授

小野寺 優

一般社団法人日本書籍出版協会理事長

近藤 敏貴

一般社団法人日本出版次協会会長

柴野 京子

上智大学文学部新聞学科教授

仲俣 暁生

公益社団法人日本文藝家協会電子書籍出版検討委員会委員長

根本 彰

東京大学名誉教授

堀内 丸恵

一般社団法人日本雑誌協会理事長

丸山 昌宏

一般社団法人日本新聞協会会長

村松 俊亮

一般社団法人日本レコード協会会長

○代償金部会所属委員

奥邨弘司（部会長）、江上節子（部会長代理）、伊藤真、小

野寺優、根本彰、堀内丸恵、村松俊亮

*審議会に関する情報は、左記に掲載しています。

ホーム＞資料の収集＞納本制度＞納本制度審議会

<https://www.ndl.go.jp/jp/collect/deposit/council/index.html>

新刊案内

外国の立法 立法情報・翻訳・解説 第294号

学校におけるメンタルヘルスと自殺予防に関するアメリカの立法

アメリカの人身取引対策に関する法整備の現状―外交政策等の取組を中心に―

ハンガリー基本法の改正―第9次及び第10次改正（特に緊急事態条項）を中心に―

中国の職業教育法の改正



A4 200頁 季刊 1,980円（税込）
ISBN 978-4-87582-902-7
発売 日本図書館協会

レファレンス 864号

条約の締結に伴う国内担保法の立案と条約遵守義務
日本と米国各州における公選職のリコール制度の概要と運用

子どもの社会的入院



A4 72頁 月刊 1,100円（税込）
発売 日本図書館協会

入手のお問い合わせ

日本図書館協会

〒104-0033 東京都中央区新川1-11-14

電話 03(3523)0812

数字で見る 国立国会図書館

『国立国会図書館年報 令和3年度』から

『国立国会図書館年報 令和3年度』をもとに、
国立国会図書館の業務、サービス、組織に関する
おもな数字を抜粋しました。

※数字は令和4年3月31日現在（令和3年度の実績）

国会へのサービス
依頼調査回答

3万320件

国会議員等からの依頼に基づき、国政
課題や内外の諸事情に関する調査、法
案の分析・評価などを行っている。

国政課題に関する
調査研究

329件



行政・司法支部図書館へのサービス
貸出4705点

支部図書館制度に基づき、各府省庁および最高裁判所に
支部図書館が設置されている。この図書館ネットワーク
をもとに、図書館サービス、資料の交換が行われている。

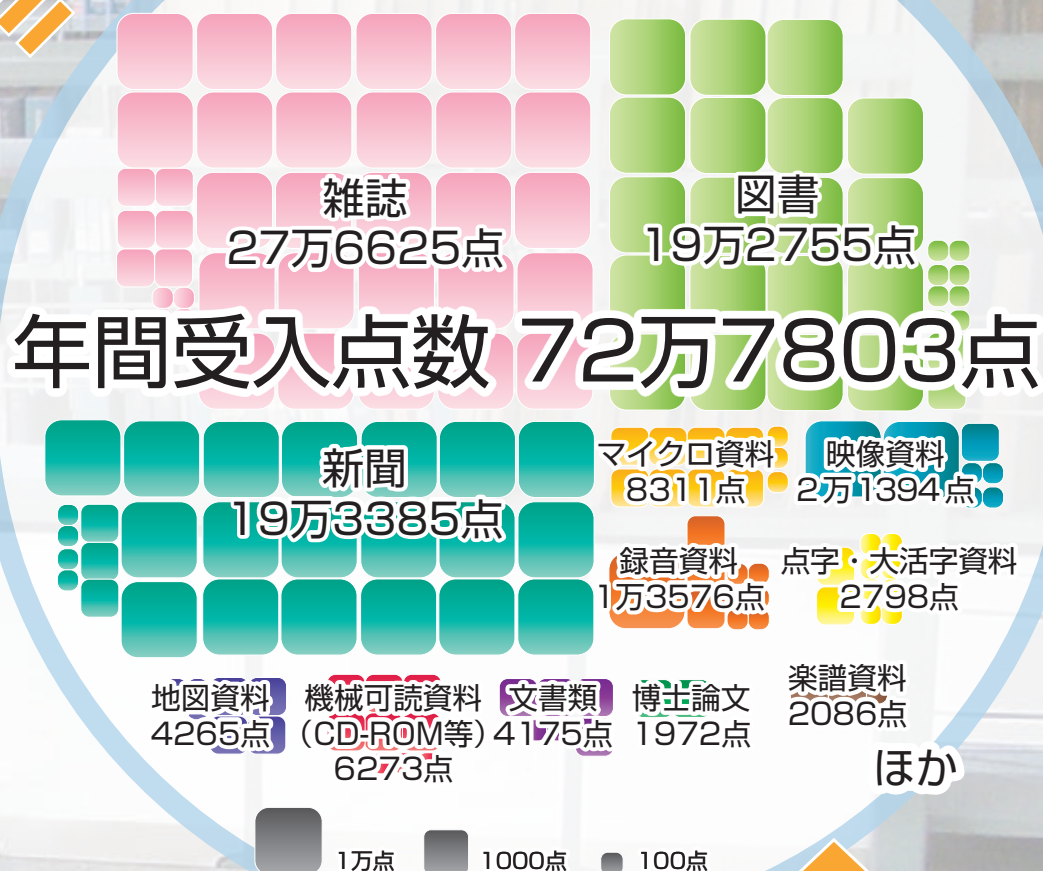
『国立国会図書館年報』は、ホームページでもご覧になれます。
<https://www.ndl.go.jp/jp/publication/annual/index.html>

書誌データ作成数（年間）

55万5192件

書誌データ提供数（総計）

2703万8569件



館全体の予算・決算

歳出予算現額
約322億4518万円

決算額
約265億4989万円

前年度からの繰越額約73億6015万円
次年度への繰越額約47億9743万円

資料収集のための予算
約23億8249万円

うち、納入出版物代償金
約3億9748万円

デジタル資料点数

インターネット公開
176万7474点

図書館送信
153万8914点
図書館向けデジタル化資料送信
サービスの提供データ

館内限定
102万3478点

所蔵点数

4621万

7530点

インターネット
資料収集保存事業
収集データ件数

21万7707件

収集データ容量

2.4PB

ホームページへの
アクセス

2949万1325件

インターネットを通じて、蔵書目録、国会会議録等
の各種データベース、調べものに役立つ情報などが
利用できる

国立国会図書館サーチで
統合検索できる書誌データ

1億2463万7994件

当館や他機関が保有する冊子体・デジタル化された画像・
音声等の様々な形態の情報を検索できる

来館者
38万3820人
東 24万6213人
西 7万 403人
子 6万7204人

閲覧
133万526点
東 121万2152点
西 9万8678点
子 1万9696点

来館して申し込まれた閲覧資料点数

来館複写
85万4856件
 うちデジタル化資料等の
 プリントアウト件数
41万6606件

来館して申し込まれた複写件数

図書館等への貸出し
1万7231点

図書館への貸出し、小中学生向けの
 学校図書館セット貸出し、展示会に
 出品するための貸出しがある

遠隔複写
30万9904件

来館せずに申し込まれた複写件数

職員数
893人

男性 47.7%
 女性 52.3%

管理職のうち女性の割合
 約 35.5%

建物延べ面積
24万6284㎡

東 14万7853㎡
 国会分館 1331㎡

西 8万4339㎡
子 1万2761㎡

書庫面積
12万578㎡

7万7829㎡
 609㎡

3万9026㎡
 3114㎡

閲覧室面積
2万5864㎡

1万8983㎡
 562㎡

4265㎡
 2054㎡

2

NATIONAL
DIET
LIBRARY
MONTHLY
BULLETIN
2023.2

NO.742

FEBRUARY
2023

CONTENTS

- 01 <Book of the month - from NDL collections>
Potteries and porcelains depicted in the Meiji period: *Tojiki isho hyohon*
- 05 Reading HAYASHI Hikaru's music manuscripts YOSHIDA Muneaki
- 13 Travel writing on Japanese libraries (special edition)
Kyoto Institute, Library and Archives
- 14 Working at the Kyoto Institute, Library and Archives
- 18 Tidbits of acquisition at the Kyoto Institute, Library and Archives:
From various donated materials
- 25 The NDL in figures: From the Annual Report of the NDL, FY2021
- 21 <Tidbits of information on NDL>
Connecting history and will
- 22 <Books not commercially available>
Hyakko ryoran: Takasago korekushon kaori no zukan: Tokubetsuban
- 23 <NDL Topics>

国立国会図書館月報

令和5年2月号 (No.742)

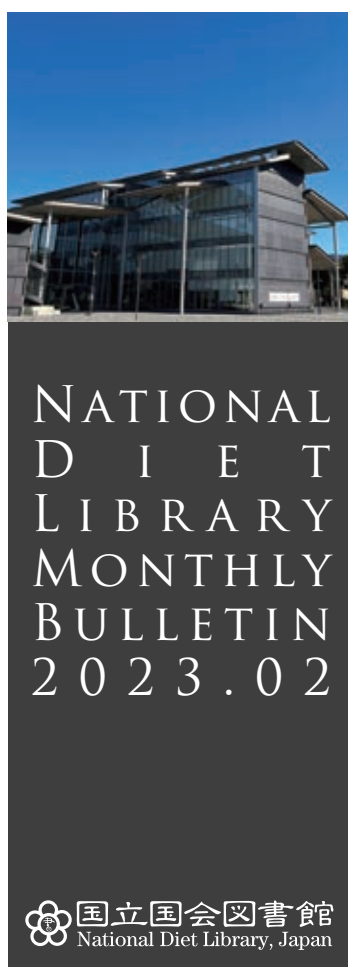
令和5年2月1日発行

発行所 国立国会図書館
編集者 松浦茂
責任者

印刷所 株式会社丸井工文社

〒100-8924 東京都千代田区永田町1-10-1
電話 03 (3581) 2331 (代表)
FAX 03 (3597) 5617
E-mail geppo@ndl.go.jp
<https://www.ndl.go.jp/>

本誌に掲載した論文等のうち意見にわたる部分は、それぞれ筆者の個人的見解であることをお断りいたします。
本誌に掲載された記事を全文または長文にわたり抜粋して転載される場合には、事前に当館総務部総務課にご連絡ください。
本誌517号以降、PDF版を当館ホームページ (<https://www.ndl.go.jp/>) >刊行物>国立国会図書館月報でご覧いただけます。



図

国

国

書

人

士